HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	エキゾチシズムと観光
Author(s)	大平, 具彦
Citation	大交流時代における観光創造, 70, 195-210
Issue Date	2008-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/34594
Type	bulletin (article)
File Information	p195-210.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

エキゾチシズムと観光

大　平　具　彦

１．はじめに

エキゾチシズム（exoticism［英語］）あるいはエグゾチスム（exotisme［仏語］）は、日本語では、「異国情緒」、「異国趣味」、「異国風」などと訳される。日本語としていささかおさまりがよくないのは、この言葉とその中身が西洋からの輸入で、しかもそれにしっくりとあてはまるものが日本にはなかったことを示している。一方、見知らぬ土地や異国を訪れる体験にほかならぬ観光という営みに、このエキゾチシズムが本質的にかかわっていることは間違いない。このエキゾチシズムというのは、そもそもどのような心の動きなのか、それはどのように形成され、どう移り変わってきたのか、そしてわれわれは今後このエキゾチシズムをどう生き、どのように観光創造と結びつけてゆくべきなのか、こうした点について考えてみることとしたい。

先ず、基本的な点について確認しておこう。エキゾチシズムは、一般的に、未知なる「異国」への憧れ、好奇心、関心のことであると言っていいだろう。すぐに気がつくように、こうした感覚、こうした心の動きは、世界のどの地域であれ、またどの時代であれ、人間に共通なもの、さらには人間にとって根源的なものである。しかしその一方で、人間にはまた同時に、古今東西を問わず、「外国嫌い」、「外国蔑視」という感情も存在する。たとえば、古代ギリシャ人は自らのことを「ヘレネス」と称し、異民族のことを「バルバロイ」（訳の分からぬ言葉を話す者の意）と蔑称していた。この「バルバロイ」という語が、「野蛮な」、「野蛮人」を示す「barbarous」、「barbarian」という言葉の語源となっているのは周知の通りである。中国においても、「中華意識」と

セットの形で、周囲に広がる東西南北の異民族のことを、東夷、西戎、南蛮、北狄と呼んで蔑視していた。日本人が、古くは中国人を、後になっては西洋人を「毛唐」(「毛唐人」) と呼んで卑しんだのも同様である。

このように、エキゾチシズムは、自分の住んでいる場所と異なる外部の世界をどう見るかという、好悪をはらんだ人間の本来的な感情と複雑に結びついている。そしてそこには自らの地域と外の地域に対する価値判断がひそんでいるゆえに、そうした情動は、単なる自然な感情というよりも、むしろ文化や歴史を背景としていることもおのずと見えてこよう。エキゾチシズムがむやみと昂ずれば外国崇拝、外国かぶれにもなり得るし、また逆に外国嫌いが自国の絶対化と結びついて、排外主義や偏狭な民族主義に転じてゆくことはよく見られる通りである。日本の場合には、明治の開国以来、「文明開化」、「脱亜入欧」のスローガンのもとに、欧米を模範として国づくりをしてきたために、この「エキゾチシズム」は独特の複雑さを帯び、それは、西洋への劣等感に裏張りされた「西洋への憧憬」となって表われるとともに、一方その背後では、西洋以外で日本のみが近代化に成功していった優越意識ゆえに、「非西洋に対する蔑視」もまたはらんでいった。昨今のミシュラン・ガイド騒動も、ある意味では、こうした文化背景の現在的な現象であるのかもしれない。

2．エキゾチシズムという語の成立と変遷

本題に入る前に、西洋原産であるこの「エキゾチシズム」(英語)、「エグゾチスム」(仏語) という語はいつ頃から使われるようになったのか、この言葉の意味的および文化的地層を少し調べておくことにしよう。フランス語の「エグゾチスム」の方についてあたってみると ── 英語の場合も大体同様な経緯を辿ったと考えてよい ──、『リトレ』や『グラン・ロベール』などの辞典によれば、「エグゾチスム exotisme」という語は、形容詞「exotique(エグゾチック)」から派生してつくられたもので、この形容詞はギリシャ語の「exôtikos」(「外の、外国の」の意) に由来し、フランスでは、フランスのルネッサンス文学の大作家ラブレーが「〈異国の〉商品の数々」という表現において用いたのが最初

（1548 年）であるという。この「異国の（exotique（エグゾチック））」という語はしかし、単に「その国（すなわちフランス）で産出しない」の意であって、現在のような「異国情緒漂う」というような意味はなく、しかもこの語自体 18 世紀になるまで使用されることはまれであったようである。

その後、17 世紀、18 世紀と、イギリスと覇権を争う形でフランスが海外に植民地を多く領有するにしたがって、この「エグゾチック」という形容詞は、「植民地の」、「植民地産の」という意味へと広がってゆき、19 世紀には、「エグゾチック（エキゾチック）な踊り」、「エグゾチック（エキゾチック）な魅力」というような、現在的な意味で使用されるようになった。形容詞「exotique（エグゾチック）」から名詞「exotisme（エグゾチスム）」が作られたのは、1845 年であるという（英語「exoticism（エキゾチシズム）」の場合も 19 世紀前半）。つまり「エグゾチスム」あるいは「エキゾチシズム」は、今からそう遠くはない近代に入って成立した観念なのだ。この「エグゾチスム」、「エキゾチシズム」の現在的な定義を確認しておこう。すなわち、それは、①西洋文明に属さない遠方の国（熱帯圏、イスラム圏、アジア圏の国々）からもたらされたものの特性、②西洋にとって遠方にあり未知なる神秘的な国々の産物、風習、文化などへの趣味、関心、それに魅せられること、であるとされる。（上記うち、とりわけ「イスラム圏」に対するエキゾチシズムが、サイードの言うオリエンタリズムへとつながってゆくのは周知の通りである。）

以上述べてきた「エキゾチシズム」（「エグゾチスム」）という語の成立と変遷から、どのようなことが見えてくるか。それは、エキゾチシズム（エグゾチスム）は、西洋特有の現象であり、西洋の世界植民地化（帝国的拡張）と結びついていたということである。もちろん、先に述べたように、人間には本来からして未知の土地に対する憧れや好奇心が存在していた（そして現に存在している）。だが、そうした心の動きが「エキゾチシズム」（日本では「異国情緒」、「異国趣味」）という観念のもとで総称され、意識され、そして世界に広がっていったのは、西洋（ヨーロッパ）が「未知の異国」なる非西洋を併合して支配下においていった近代の構造と表裏一体の関係で結びついているのだ。興味深いことに、西洋において、「ツアー　tour」、「ツーリズム tourism」（観光）という語が定着し、観光（「未知なる異国」を「周遊」［ツ

アー］すること）が普及してゆくのも 19 世紀である。つまり、エキゾチシズムと観光とは、西洋が非西洋の地域を併合しながら世界化していった文明の構造のもとで形成された文化現象であり、両者は本来からして兄弟の関係にあると言ってよい。

3．エキゾチシズムの諸例を辿って

エキゾチシズムを示す例は数限りなくあるが、典型的な例のひとつとして、画家ゴーギャンのタヒチ移住が挙げられるだろう。若い時分に世界一周の旅行などを経験し、株式仲買人を職としながらアマチュア画家として出発したゴーギャンは、実利的な西洋文明になじめず、自身の絵画の新境地を開くため 1891 年にフランス領タヒチに移住する。文明に汚されていない無垢なる楽園を求めて旅立った彼を突き動かしていたものこそは、まさしくエキゾチシズムそのものだったと言っても過言ではない。そしてゴーギャンはタヒチで自身の絵画を見事に開花させ、その画風はヨーロッパの近代絵画をも刷新してゆく。一方ではフランスの帝国主義的拡張を背景としながら、また他方では芸術の革新をもたらしていった彼のエキゾチシズムは、エキゾチシズムという文化現象の多元的な構造をよく示している。ゴーギャンの晩年の大作「われわれは何処から来たのか、われわれは何者なのか、われわれは何処へ行くのか」（1897 年）からは、画業的にも、また標題に込められた示唆的な内容からも、エキゾチシズムと連動しながらヨーロッパ文明がひとつの転換点に入っていったことが如実に窺える。

さて、エキゾチシズムが本格的に流通するのは 19 世紀であると書いたが、その源流は 18 世紀さらには 17 世紀（「シノワズリー」［中国趣味］の登場）にまで遡る。そして興味深いことに西洋のエキゾチシズムに呼応して、中国でもエキゾチシズムが生まれてゆく。中野美代子著『乾隆帝 ── その政治の図像学』によれば、それをよく示すのが、清の乾隆帝治下における長春園西洋楼（西洋風の宮殿と庭園）の完成（1760 年）と、イギリス王立植物園（キュー・ガーデンズ）内の高さ 50 メートルの中国風の塔（パゴダ）の建設（1761 年）との照応であるという[1]。エキゾチシズムは確かに西洋原産ではあるけれど、自分の感覚

や思考の尺度に収まらない「異質なもの」の不思議な磁力につい魅かれてしまう心性は、どうも洋の東西を問わず普遍的であるらしく、こうした東西双方のエキゾチシズムの往還や交流が、かなりの度合いで近現代の文化の地層をつくっているのである。たとえば、江戸時代の 18 世紀に長崎の出島を通して日本に入ってきた西洋画法の遠近法がそれまでの浮世絵の構造を変え、さらにその遠近法を独特に取り入れた浮世絵がジャポニスムとなってヨーロッパに流入して印象派などの新しい絵画を生んでいったのは、その代表例と言ってよい。

日本に話が及んだので、ここで日本におけるエキゾチシズムの例をひとつ挙げてみたい。以下に掲げるのは、北原白秋の詩集『邪宗門』（1909 年［明治 42 年］）の有名な序詩「邪宗門秘曲」である。

われは思ふ、末世の邪宗、切支丹でうすの魔法。
黒船の加比丹を、紅毛の不可思議国を、
色赤きびいどろを、匂鋭きあんじやべいいる、
南蛮の桟留縞を、はた、阿剌吉、珍酡の酒を。

目見青きドミニカびとは陀羅尼誦し夢にも語る、
禁制の宗門神を、あるはまた、血に染む聖礫、
芥子粒を林檎のごとく見すといふ欺罔の器、
波羅葦僧の空をも覗く伸び縮む奇なる眼鏡を。

屋はまた石もて造り、大理石の白き血潮は、
ぎやまんの壺に盛られて夜となれば火点るといふ。
かの美しき越歴機の夢は天鵝絨の薫にまじり、
珍らなる月の世界の鳥獣映像すと聞けり。

あるは聞く、化粧の料は毒草の花よりしぼり、

1　中野美代子『乾隆帝 ── その政治の図像学』、文藝春秋（文春新書）、2007 年、225 頁。

腐(くさ)れたる石の油(あぶら)に画(ゑが)くてふ麻利耶(まりや)の像(ざう)よ、
はた羅甸(らてん)、波爾杜瓦爾(ぽるとがる)らの横(よこ)つづり青なる仮名(かな)は
美くしき、さいへ悲しき歓楽(くわんらく)の音(ね)にかも満つる。

いざさらばわれらに賜(たま)へ、幻惑(げんわく)の伴天連尊者(ばてれんそんじや)、
百年(ももとせ)を刹那(せつな)に縮め、血の磔背(はりきせ)にし死すとも
惜(を)しからじ、願ふは極秘(ごくひ)、かの奇(く)しき紅(くれなる)の夢、
善主麿(ぜんすまろ)、今日を祈(いのり)に身(み)も霊(たま)も薫(くゆ)りこがるる[2]。

また何とまあ絢爛華麗なるエキゾチシズム讃歌であろうか。しかもエキゾチシズムなどという外来語やカタカナ言葉を用いず、漢字、平仮名、ルビを縦横無尽に駆使することによって、西洋の文物に対する狂おしいまでの耽溺が、まるで言葉による一幅の錦絵のように表象されている。全体は、邪宗とされたキリスト教への熱狂的信仰を歌う「秘曲」として展開してゆくが、それをモチーフにして、当時の日本人の心に深く浸透していった西洋異国文明への憧憬と驚異と好奇の念を、妖しいまでの耽美的かつ幻想的な言語表現によって映し出したものである。

ちなみに、分かりにくい用語に一通り説明を加えておくと、「でうす」＝神(デウス)(ポルトガル語)、「加比丹(かぴたん)」＝船長(キャプテン)、「びいどろ」＝ガラス、「あんじやべいいる」＝カーネーション（オランダ語)、「桟留縞(さんとめじま)」＝インドのサントメ産の縞織り綿布、「阿刺吉(あらき)」＝オランダ渡来の蒸留酒、「珍陀(ちんた)」＝赤葡萄酒（「チンタ」：ポルトガル語で「赤い」)、「ドミニカびと」＝カトリックのドミニコ派、「陀羅尼(だらに)」＝祈祷の言葉（梵語を転用)、「あるは」＝あるいは、「聖磔(くるす)」＝十字架（ポルトガル語)、「欺罔(けれん)の器(うつは)」＝顕微鏡のこと(「欺罔(けれん)」：欺くこと)、「波羅葦僧(はらいそ)」＝天国(パライソ)（ポルトガル語)、「伸(のの)び縮(ちぢ)む奇(き)なる眼鏡(めがね)」＝望遠鏡のこと、「大理石(なめいし)の白き血潮(ちしほ)」＝石蠟(せきろう)（パラフィン）のこと、「ぎやまん」＝ガラス、「越歴機(えれき)の夢」＝幻燈のこと、「腐(くさ)れたる石の油(あぶら)」＝油絵具、「さいへ」＝そうは言っても、「伴天連尊者(ばてれんそんじや)」＝神父、「善主麿(ぜんすまろ)」＝イエス・キリスト、等々。

2　北原白秋『白秋詩抄』、岩波書店（岩波文庫)、1985 年（1978 年)、149〜150 頁。

これらの語をいちいち注記したのは、全体の意味をとりやすくするためもあるが、むしろ ── 横文字やカタカナではなく ── 漢字と平仮名ルビを活用した白秋の日本語の表記と独特の語法こそが、日本人の西洋に対するエキゾチシズムをかくも見事に息づかせ脈打たせていることを、じっくりと味わってもらいたいがためである。卑近な例を挙げれば、「コーヒー」とカタカナ書きにするよりも、「coffee」と横文字表記にするよりも、「珈琲」と漢字書きにした方が、異国の香りをはるかに濃密に呼び覚ましてくれることに、それは通じている。明治の先人たちは、漢字、平仮名、カタカナを用いて西洋の文明を日本語の血液そのものの中に摂取して溶かし込んだ。日本の近代化を果敢に成し遂げたのは、実は漢字（これも元はと言えば外国語である）であったことを是非とも心に留めておきたい。

昨今はどの領域でもカタカナ表記の外来語が氾濫する一方であるが、それは見た目のカッコウづけに流されてしまう振る舞いである以上に、異国の文物を噛み砕いて自国の滋養へと消化してゆく言語（日本語）の力が、かつての時代に比べて、格段に落ちてきているためではあるまいか。グローバル時代はコミュニケーションする力が肝要であるとよく言われるが、それが外国語（英語）を使えるようになることだけに偏重していてはむしろ危ういと言うべきだろう。コミュニケーション力とは元来からして文化力のことにほかならないゆえに、そこでは異国のものをどう自分の言葉（脳）に取り入れ、それをどのように消化しどう発信してゆくかこそが要諦なのであって、そのためには日本語の力が基盤になければならない。そしてこれから述べてゆくように、同様のことが、エキゾチシズムとどう向き合いそれをどう生きてゆくかについても、まさしくあてはまるのである。

４．ピエール・ロチとエキゾチシズム

以上、エキゾチシズムについて、いわばそのアウトラインを述べてきたが、これを受けて、エキゾチシズムを終生のテーマとしたフランスの二人の作家を取り上げ、それは果たしてどのような体験であるのか、少し掘り下げて考えてゆくことにしたい。

先ずは、ピエール・ロチ（1850〜1923、本名はジュリアン・ヴィオー）について話を進めてゆこう。彼は今では余り話題にはならないが、かつてはエキゾチシズムを代表する作家として広く知られ、日本でも翻訳がいくつか刊行されている。ロチは元来は海軍士官であり、その職業を通じて世界各地を周航し、各地での「エキゾチシズム」体験を題材にした小説で一世を風靡した。代表作を挙げておくと、『アジャデ』（1879 年、イスタンブールが舞台）、『ロチの結婚』（1882 年、タヒチが舞台）、『アフリカ騎兵の物語』（1881 年、セネガルが舞台）、『お菊さん』（1887 年、日本が舞台）『氷島の漁夫』（1886 年、ブルターニュの漁村と北海が舞台）などがある。

ロチのエキゾチシズムに傾けた情熱が尋常でないのは、フランス文学者の岡谷公二氏が紹介している「ピエール・ロチの館」[3] によってまざまざと実感できる。これは、フランスのロシュフォールにあるロチの生家を博物館にしたもので、ロチは世界各地の滞在先から持ち帰った品々でそれぞれの地の異国的雰囲気を圧倒的な迫力で再現している。建物は 3 階建てで部屋数は 40 にも達し、「モスクの間」、「トルコの間」、「アラブの間」、「中国の間」、「日本の間」（現存せず）、「ルネッサンスの間」、「ゴシックの間」などが絢爛豪華に整備され、今では観光の名所となっているという。

ロチの小説の構成は、基本的には共通で、ロチをモデルにした西洋人の男と、滞在地の異国の女との恋物語を異国情緒あふれる描写で綴ってゆく。海軍士官としての任務が終了し任地を離れる時は、その恋物語は終わりとなる。いささか（いや「ひどく」と言うべきか）身勝手な話なのだが、それが可能であることを夢想させたゆえであろう、その分だけ却ってフランスやヨーロッパの男たちの心をそそったものと思われる。

たとえば、日本の女性がヒロインとなって登場する『お菊さん』を見てみよう。この小説は、1885 年（明治 18 年）7 月から 9 月にかけてロチが長崎に滞在した際に、ロチ本人とお菊さんとの「結婚」── 周旋人の仲介による言わば「現地妻」という形での同棲生活 ── とその交情を、舞台である長崎の情

3　岡谷公二『ピエール・ロティの館 ── エグゾティスムという病い』、作品社、2000 年、7 〜30 頁。

景や日本の風物や風習への印象を背景に描いたもので、ロチは、次の任地である北京への出発とともに、お菊さんのもとを特段の愛惜もなく去ってゆく。物語の随所随所には、日本への印象が散りばめられており、それがロチの内面の心境を浮かび上がらせる。日本という異国は彼に独特のエキゾチシズムをもたらしたようで、たとえば後年になって彼は次のように述べている。

> 本当のところ、この国ほど美しい国はないし、また、女たちも物事も、眼を楽しませるために、これほどの優雅さと奇想さでもって、これほどみごとに身を整えるすべを心得ている国はない[4]。

だが、こうした一方で、お菊さんとの長崎での暮らしを記述する端々には、日本と日本人への違和感や軽侮を示す言葉も各所に見られる。日本人はよく猿にたとえられ、黄色く醜いからだを揶揄され、日本はまったく閉ざされた思考の世界であり、フランス人（西洋人）の頭脳を裏返しにした頭脳の持ち主たちの国であるとされる。まったく別世界である国での初めての滞在であるから、ある程度のずれを感ずることはやむを得ないにしても、しかしその背後には、自分の文化圏ではない異国を眺める西洋人の優越的な視線がひそんでいることは間違いないだろう。そして、こうした異国への強烈なエキゾチシズムとその一方での帝国主義的な眼差しは、単に『お菊さん』だけでなく、ロチの小説の共通の性格であるという。

さて、以上の点から、ロチのエキゾチシズムは次のように特徴づけることができるだろう。ひとつは、よく指摘されることだが、それが印象主義的エキゾチシズムであるという点が挙げられる。つまり、異国の風物（とりわけ女たち）や風情をただ観賞の対象として享受し、異国から受けるそうした新奇さをもっぱら感覚的な印象として味わおうとするものである。ここから言わばひとつながりの形でもうひとつの特性が浮かび上がる。すなわち、ヨーロッパという文化的優越性のもとで異国の女性を欲望の対象とする帝国主義

4　Chantal Edel (présentation): *Mukashi-Mukashi 1863-1883—Le Japon de Pierre Loti, Photographies par Beato et Stillfried*, Les Editions Arthaud, Paris, 1984, p.20.

的（植民地主義的）な性格である。こうした二つの特性を別の面から表現すれば、それは、自身の基盤やアイデンティティーを誇示あるいは温存したままで、ひたすら異国の環境や雰囲気に ── 感覚的に、情緒的に ── 浸るエキゾチシズムであると言っていいだろう。

このような特質ゆえに、エキゾチシズム作家ロチの評判は最近ではまるで芳しくないのだが、しかし角度を変えて見るならば、ロチはそうした面までも含んで「エキゾチシズム」という人間の本性に根ざす心の動きを、生涯を賭けて生きたことは確かである。

私は自分のいない場所へのノスタルジーにいつも悩んでいる[5]。

私は、ここととあそこへのノスタルジーを持っている。私はあそこととここに同時にいたいのだ[6]。

こうしたロチの言葉は、岡谷公二が言うところの「ここに深くつながれているゆえに、あそこに向かわずにはいられない」[7] 人間の心を適確に表現したものであり、エキゾチシズムの核心を衝いていると言っていい。

エキゾチシズムがこのように「ここに深くつながれているゆえに、あそこに向かわずにはいられない」心性であるとすれば、人間が必然的に「限定された地」において生きざるを得ない限りにおいて、それは人間にとってまさしく根源的な感覚であると言わねばならない。こうした見方に立って、エキゾチシズムを敷衍して考えてみるならば、たとえば、われわれがかつてそうであった幼年そして少年少女の時代にあっては、周りに広がっている世界はいまだ足を踏み入れていない「異国」であり、その意味ではまさしく「エキゾチック」な感覚を日々経験しながら生きていたはずである。というか、人間はみなこうした「異国体験」を通して世界を知り、大人へと成長してきた

5　岡谷公二『ピエール・ロティの館 ── エグゾティスムという病い』、前掲書、123 頁。
6　同。
7　同。

のだ。しかし大人になるとそうした感覚は次第に鈍磨してゆき、いつの間にか自分の周りの世界はすべて見慣れたものとなってしまう。そこから一時的に脱出するために観光によって「異国」を訪れても、すでに商品として用意された「異国感覚」をただ消費するだけである。それはいわゆる「他律的観光」とならざるを得ず、せいぜいロチ風の「印象主義的エキゾチシズム」に浸る（というよりも「浸った気分になる」）ことで自足して、また元の生活に戻るといった按配なのだ。では、われわれは子供のときにはあんなにも生き生きと脈打っていたあのエキゾチシズムの原感覚を、どのように保持あるいは再獲得してゆくべきなのか。このテーマを人間の本源として考察し、それに生涯を賭けた作家がヴィクトール・セガレンである。

5．ヴィクトール・セガレンとエグゾチスム

ヴィクトール・セガレン（1878〜1919）は、海軍医として、タヒチ、中国、チベットなど世界各地を巡り、エキゾチシズムを人間の生感覚の根源として独自の人間学に高め、最近世界的な注目を浴びているフランスの作家である。代表作は、『記憶なき民』（1907 年）、『碑』（1914 年）、『絵画』（1916 年）のほか多くは、死後大分経った 1960 年代から刊行されはじめ、主要なものとしては、『ルネ・レイス』（1922 年）、『オルフェ王』（1962 年）、『エグゾチスムに関する試論』（1978 年）、『チベット』（1979 年）、『天子』（1985 年）等がある。日本でも現在『セガレン著作集』が刊行中である。生前は人々の関心をまったく呼ばず、死後 40 年余も経ってから急に注目されるようになったのは、セガレンがそれだけ時代を先駆けていたということを示していると同時に、1960 年代以降、世界の構造がどこか深いところで大きく変わり始めたことも物語っていよう。

セガレンにおいて、エキゾチシズムは原理的な変換を遂げる。すなわち、セガレンにとってエキゾチシズムとは、ロチのように異国の文物、風習、自然を、「自己のそれまでの枠組みを温存したまま、ただ自身の感覚の表面に〝書き記す〟（＝〝印象づける〟）」── 印象（impression）とは「内部に（im-）」、圧し付け、刻印すること（press-ion）── のではなく、これほどまでに広く、

豊かで、かつ深い世界の中へと分け入り、異質なものとの接触と多様性の体験によって、「異国を観賞するよりもむしろ、自身の方がそのつど内部から組み換えられてゆく」ことにほかならない。換言すれば、それは、世界の多様性の絵柄をかくも壮大に織りなしているそれぞれの要素の「差異」の豊かさ、深さ、微妙さを味わい尽くすことによって、あの子供のときの感覚を年月とともに熟成させつつ、その熟成を通して自身もまた芳醇なワインになってゆくということなのだ。そこにおいては、ロチ風の印象主義的エキゾチシズムや、そうした視線による西洋中心の世界像そのものは根本から組み換えられていると言ってよい。そうであれば、セガレンの言い方に倣って、このセガレン的エキゾチシズムについては、この論ではこれからはフランス語で「エグゾチスム」という名で呼ぶことにしたい。さらに彼の呼称にしたがえば、「エグゾット」とは、こうしたエグゾチスムを生きる者の謂である。

実際のセガレンの言葉を引用してみよう。

> 〈エグゾチスム〉の感覚とは、異なるものの観念以外の何ものでもない。〈多様なるもの〉の知覚、何かが自分自身ではないという認識以外の何ものでもない。そしてエグゾチスムの力とは、異なることを把握する力にほかならない[8]。

> 自己を把握するあらゆる存在は必然的に自己を自分とは異なるものとして把握する[9]。

> 存在が高揚するのは、〈差異〉によって、そして〈多様なるもの〉の中でである[10]。

8　ヴィクトル・セガレン（木下誠訳）『〈エグゾティスム〉に関する試論／羈旅』、現代企画室、1995年、135頁。（なお、文中「エグゾティスム」という語は「エグゾチスム」に直してある。）

9　同136頁。

10　同200頁。

セガレン独特の凝縮された抽象度の高い表現となっているが、分かりやすく言い直せばこういうことだろう。すなわち、われわれは自分（私）というものを、実体的にしかと定まった個体であり自身のことは充分に知り尽くしているように考えているのだが、しかし「私」の内部にはまだ開いてない箱が何重にも折り畳まれて宿っているのであって、「私」がまさに充実した「私」として把握できるのは、その箱が開かれ、今までの「私」とは異なった新しいページとしての「私」が実感される時であり、むしろ「私」とは本来からして何か固体のような固定的な実体なのではなく、その新しいページにそのつど自身の文字を書き込んでゆく途上的な存在としてあるということなのだ。そしてセガレンによれば、自己の内部に眠っていた箱を開いて自身に新しいページをもたらしてくれるものこそ、多様性の宇宙における自己とは異なるものとの遭遇の体験であるエグゾチスムにほかならない。

そうであれば、セガレンのエグゾチスムは、次のように言い表すことができるだろう。第一は、異国を旅する者は ── その地での風物、風情をただ印象として感覚のスクリーンに映して消費するのでなく ── 異質なものとの遭遇による多様性の体験によって、自己を「それまでの私とは別の私への生成変化」として把握するという点である。もうひとつ、第一のものよりもさらに重要な点として挙げるべきは、セガレンのエグゾチスムは、旅行あるいは観光の次元を超えて、人間の存在や生のあり方にまで拡張されていることである。すなわち、子供がまわりの世界への「異国」体験を通して成長してゆくように、人間は本来的に、エグゾチスムという「異国」体験を通して、その生を呼吸しているということであって、エグゾチスムこそ人間の生の原動力にほかならないと喝破している点である。

興味深いことに、このエグゾチスム観から、いくつもの命題が引き出される。フランスの思想家トドロフの言に倣って[11]、例として二つほど挙げるならば、このエグゾチスムが教えるところでは、対象は見慣れたものになってはいけないということであるから、他の人間と連れ立って旅に出ることは、異

11　ツヴェタン・トドロフ（小野潮・江口修訳）『われわれと他者 ── フランス思想における他者像』、法政大学出版局、2001 年、514〜515 頁参照。

国の印象や経験を共有することになってしまい、その結果、自分自身のエグゾチスム体験はその分限定を受け薄められることになり、したがって、「一人旅こそ最も豊かな旅」と結論される。これは旅行者の多くが同じような経験をしているところでもあり、現在の観光においても、団体旅行から個人旅行へと基軸が大きく移っていることとも照応する。もう一点挙げると、これはいささか逆説的と言わざるを得ないのだが、「外国の文化や風物を、その国の人間と同じように理解できるようになってはいけない」ということである。なぜならば、そのように他国の文化をその国の者と共有できるようになってしまえば、エグゾチスムの感覚そのものが摩滅していって、生を高揚させることができなくなるからだ。要は、異国の内部に深く沈潜しつつも、常にエグゾチスムの感覚を研ぎ澄まし、自身の尺度を果てしなく世界の多様性と共鳴させてゆく感性が求められるということである。この領域に立つには相当の力量が要ることは確かであるが、翻って考えるならば、世界を体験するという営みに参与するには、そのくらいの意欲と研鑽とが必要だということなのではあるまいか。このことはまた、サイードが著作『オリエンタリズム』の中で引用したことで有名になった聖ヴィクトールのフーゴーの次の言葉に見事に表現されていよう。

> 故郷を甘美に思う者はまだ嘴の黄色い未熟者である。あらゆる場所を故郷と感じられる者は、すでにかなりの力をたくわえた者である。だが全世界を異郷と思う者こそ、完璧な人間である[12]。

「故郷を甘美に思う者」とは自分の生きてきた文化のみに自足してしまう内向きの者のことであるが、一方「あらゆる場所を故郷と感じられる者」、すなわちどの国でも自分の国であるように生きることのできるいわゆる「コスモポリタン」と呼ばれる者は、確かに世界を手中に収めているようには見えるのだが、実はそれは世界のどことも親しくなっているだけであって（その領

12　E. W. サイード（板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳）『オリエンタリズム』（下）、平凡社（平凡社ライブラリー）、2002 年（1993 年）、138 頁。

域にまで達するのは並々ならぬこととはいえ)、真に世界の襞に深く分け入ってゆくためには「世界のどこにあっても異郷にあると感覚できること」、つまり「エグゾチスム」を生き続けることこそが人間という存在の根本的な条件であり、さらにはそうしたありようこそ、実は人間と世界との根源的な関係なのである。

このように見てくるならば、「世界の多様性」そして「自己と異なるもの」と交わり合う（交合する）ことによって、自己を他のものへと開いてゆくエグゾチスムという体験は、すべてが単一の原理によって画一化してゆく昨今のグローバリゼーションに代わる「多様性」の原理を生きることにほかならない。最近セガレンが世界的に注目されているのも、彼のエグゾチスムの考え方が、不気味に拡張し続けるグローバリゼーションを組み換えるオールタナティヴ（代替案）の可能性を豊かに蔵しているためと思われる。

6．まとめ

以上述べてきたように、「ここに深くつながれているゆえに、あそこに向かわずにはいられない」[13] 人間の心の表現にほかならぬエキゾチシズムとは、実は、それが人間という存在の根源的な様態であるがゆえに、人間の生の原点であり、生の糧そのものであると言っても過言ではない。「ここに深くつながれているゆえに、あそこに向かわずにはいられない」という人間にとってのこの根源的な感覚をもっと拡張して考えてみるならば、たとえば昆虫採集に夢中になるのも、星空を見上げて星座や天体に心魅かれるのも、さらには動物界、植物界、鉱物界を自由に往来してしまうあの宮沢賢治の童話の世界も、そして男と女が魅かれ合う恋も、「ここ」ではない「異国」あるいは「異なるもの」に向かう心性である限りにおいて、われわれの生の営みのひとつひとつは、本来からしてこの「エキゾチシズム」の感覚に裏打ちされていることが感得されるだろう。

旅とは、そして観光とは、こうした「エキゾチシズム」を生きる営みであ

13　岡谷公二『ピエール・ロティの館 ── エグゾティスムという病い』、前掲書、123 頁。

り、生を拡張する体験である。それを、まさしく自分自身の新たな「旅立ち」へと、自分自身の「再起動」へとつなげてゆくこと。そのためには自分自身ももう一度深々と呼吸をし始めねばならない。観光創造とは ── ただ外から与えられるものではなく ── 同時に、自分創造であるのだから。